

## 【研究課題】

# 精神疾患罹患患者の死因に関する統計学的検討

研究期間：2011年4月1日～2020年3月31日

本研究は、精神・神経作用薬の処方になされている事例を対象とした疫学調査である。これらの多くは多剤を大量に処方されており、また処方期間が長いという特徴を有していた。治療の比較的初期の段階で自殺を目的として、処方薬を多量に服用する事例も存在する一方、比較的安定が得られれば、薬物に関連しない内因死事例のグループも存在した。

さらに、剖検により血液より精神・神経作用薬が検出された事例を抽出して行った調査では、血中薬物濃度が中毒域や致死域に達しながら、別の内因により死亡している事例や、血中薬物濃度が治療域以下でありながら、剖検所見上、形態学的に死因を見出し得ない事例も存在し、血中薬物濃度は個人により差がある事が判明し、これらは代謝、排泄に関する臓器以外に、体質的な薬物分解能の差が影響している可能性が示唆された。

一方、比較的身近なガス体であるLPガスやハイドロフルオロカーボン(HFC)の濫用がしばしば行われ、これによる死亡事例が少なからず存在していることが確認された。